# 日本ヨット界の現状と課題

# Current Status and Issues of Japan Sailing Industry

1K08B233-7　横田敏一

指導教員　主査　石井昌幸先生　　副査　寒川恒夫先生

## はじめに

セーリング競技はその長い歴史を持っているにも関わらず、日本ではマイナー競技とされている。世界最高峰ヨットレースである「アメリカズ・カップ」についても日本ではその大会の内容は世間に伝わることはほとんどない。これが現在の日本ヨット界の現状である。しかし、海外では、「キング・オブ・スポーツ」としてその人気を博している。人口人数や経済事情も関係はあると思うがこのような差がなぜ生まれたのか。

本論文では、主に150年以上も続いている「アメリカズ・カップ」や日本セーリング連盟（JSAF）の取り組み姿勢などを取り上げ、今後の日本ヨット界の現状と課題を考察する。

## 第一章　　ヨット競技

ヨット競技の歴史は長い。貴族の遊びであったヨット競技の精神は今なお語り継がれ、世界最高峰ヨットレースであるアメリカズ・カップは159年もの歴史がある。その歴史あるレースに日本も3回チャレンジをしているが勝つことはできなかった。

このアメリカズ・カップで勝つことも重要だが、他の種目でもアピールすることも重要である。その舞台となるのがオリンピックである。ヨット競技はその種類の多さから毎回出場する種類が変わってしまう。その中でも長い歴史があるのが「国際470級」である。日本は過去の2度のメダルをこのクラスで獲得している。近年、日本の470クラスの技術レベルは確実に上がっており、世界でも上位を争えるほどになってきている。オリンピックでメダル獲得争いが毎回できるようになれば今後の日本ヨット界の発展につながる可能性が高いと考える。

## 第二章　現代ヨット競技の現状

現代ヨット競技界は学生が支えているといっても過言ではない。しかし、その学生とプロである社会人セーラーとの間にはかなりのレベルの差がある。競技レベルの差もそうだが学生と社会人セーラーが使う艇にも差がある。この物の差を改善しない限り、卒業する学生セーラーが次のステップに進むための「環境」が整わない。第2章ではこの競技レベルの差が生まれる原因や競技を続けるための環境をどうすれば良いのかを考察する。

## 第3章　近代化するヨットレース

ヨットレースは年々近代化していき、艇がハイテク化するとともに観客を巻き込んでヨットレースを見せる試みをしてきている。2012年度に行われる予定の第34回アメリカズ・カップで使われる艇は風速の3倍の速度で走れるという。さらに数百メートル先の風も予想できるシステムも開発された。海外では観客席をヨットハーバー付近に作り、その近くでヨットレースを行うことによってレースを観客に見せるようにしている。こういった取組がヨット競技の商業化をさらに後押しする。日本でもインターネット上で、GPSを使い、航跡を見れるというソフトを作った。今後ますますヨットが世間の中に浸透させるための手段ができるかもしれない。

次回行われる第34回アメリカズ・カップはまさに観客が世界最高峰のレースを近くで見れるような取組をするという。

## おわりに

日本でヨットを普及させるには、スタープレイヤーの存在や世界で活躍できる競技レベルが必要である。競技レベルが上がれば、日本開催のヨットレースを行えるようになる可能性が出てくる。他にも「資金」や「環境」などまだまだ改善すべき点はあるがまずは世界一になり知名度を上げなければならないと感じた。日本のアメリカズ・カップ挑戦は2000年以降していないので、狙うとすればオリンピック金メダルである。

日本では、過去のオリンピックにおいて2度メダルを取った実績があるが、その後につながっていないのである。本論文でも挙げた通り、競技人口は減ってきているので今後ますます競技成績を残せないとなるとヨット競技自体の存続が危ぶまれる。現在、日本では470クラスが世界と戦えるレベルになってきているので、今後はこの470クラスでオリンピック金メダル取得を期待する。